



水路と空中路

田山花袋

一
往昔の奥羽街道もいろ／＼なことを私に思はせるに十分だつた。ずつと遠い昔は東京灣に沿つた方面は通れなかつ

たので、さびしくとも武藏野の中を横断しなければならなかつた。私は昔の繪にある薄や茅の中を押分けるやうにして通つて行つた行旅のさまをよく頭に浮べた。秀吉でも家康でも武藏野を越して遠く下野の小山まで行つた。

しかしさうした武將の中で、一番遠くまで東北に行つたのは源氏の人たちであつたことは争はれない。頼義にしても義家にしても、東北を征伐する關係上、かなり遠いところまでその足跡を残してゐる。頼義は陸奥に、義家は出羽

に最も多くそのあごをさぐめてゐるやうである。や、後れて、頼朝が平泉まで行つた形も面白い。東國の武士だち——平氏を追つて壇の浦まで行つた武士だちを伊達の大城門や武隈の府や多賀の府に置いて見た形も興味がある。今日私だちが何も知らずに通つて行つてゐる遠い東北の地方にも昔の人だちのあごはかなりに行わたつてゐたのである。

私の見たところでは、奥羽は段々に開けて行つたらしい。蝦夷を征伐しては少し出て行き、また征伐しては少し出て行くと言つた風であつたらうと思ふ。所謂足だまりを此方から數へて見るに、小山、宇都宮、那須（烏山から黒羽）、白河の關を越してからは矢吹、須賀川、郡山、それから武隈の府、多賀の府といふ風であつたらうと思ふ。藤原秀衡時代の一里塚であつた笠卒塔婆が今でも往々にして

白河以北の街道に残つてゐるのも道路の紀念物としては頗る珍重すべきものであると思ふ。

二

中でも碓氷峠の方から奥羽に向つて出て行く一路がこゝに多く私の心を惹いた、あの高崎から利根をわたつて、渡良瀬川の沿岸をずつと佐野の方へ出て来る路——それも、兎に角、足利の川の此方側のところを通つて、梁田の東あたりで、佐野の中川（渡良瀬川）を渡つたらしい。そしてその川はかなりに河船の往來で賑つたらしい。

萬葉集の中には、この附近の歌がかなり多く見出される。安蘇の山群——人に由るに、それは安蘇郡の山ではなくて、あの榛名山脈を指してゐるものであると言つてゐるけれど、また佐野の舟橋を利根川に架つてゐたものも言つてゐるけれど、私にはさうは思はれない。私はやつぱり足利、佐野の後にそびえてゐる安蘇郡の山が安蘇山群だ

思つてゐる。成ほさこの山脈なればこそ昔の旅旅の人が行先を思ひ、故郷を思ひ、さびしい心を抱いて通つて行つたであらうと思はれるのである。またあの三義山かじやまが一つ獨立して遠くから眺められてゐる形が何とも言はれない。私は下野の府が今の壬生あたりにあつて、そこに向つて旅客が急ぎつゝ歩いて行つたさまなごを想像した。また、流謫された公卿が牛車に乗せられながらそこらを通つて行つたさまを想像した。

三

その時分にあつては、船路も非常に發達してゐたに相違ない。おそらく川のあるかぎり民船が何處でも往來したやうな一時代があつたに相違ない。今日から見るこゝでもそんなこゝが考へられないやうな光景が、到るころに渦巻きつゝあつたのである。利根川でも渡良瀬川でも、思川でも、その他のごんな川でも、かれ等は皆な旅包を背うたまゝ、疲れ切つて舟をその渡頭に求めた。従つてその水驛

には休む店もあれば食ふものもあり飲むものもあると言つた風であつたに相違ないのである。

こゝに東北から來て江戸に入るものは、塵埃にまみれた白い草鞋と脚絆をを下野の阿久津あかつつの渡頭にぬいで、そのまゝ一水にその身を任せるのを常としたのであつたが、その舟路は今でもちやんこ残つてゐて、久保田の水驛の賑かであつた形なごもはつきりそれと指點するこゝが出来るのである。かれ等はそこから水海道に行つて、境の行徳舟を求めて、そして江戸に入つて行くこゝを使ひした。

私が記憶してゐるのでも、利根川の水路は盛んなものだつた。堤に添つて料理屋が發達し、白粉をつけたものなごが客を相手に酒の酌をしたりするのを私は子供心にも覺えてゐる。夜は船に火が燃えて、それが明るく河を照した。艫かきのきしる音、楫のぎいゝ鳴る音、時には大きな帆が怪鳥か何ぞのやうにその傍を掠めて動いて行つた。つまりその頃にあつては、早船は今日の自動車のやうなものであつたのである。

水路が陸路に變つたために、すつかりその土地が荒廢して丁ふやうな事實ををりく、私は發見した。その大きな一つの例は、あの支那の大運河の水運が、汽車が出来て了つた、めに、全く荒廢して了つたことなどである。そしてその自然の結果として、その沿岸の地は全く衰退し、後には土匪がその巢窟を構へるやうになつた。

つまりさうした中にも、時の經つて行く形がそれとはつきり指さされるのである。

名古屋の向うにある榎斐川や木曾川の舟路も、昔は賑やかなものだつた。一時は殆どそれが交通の主要路を成しゐたことなごもある。現に、源義朝が知多にわたる時には、この舟路を取つたばかりではなく、海から來る美濃の府への交通は主としてこの海門から入つて來るのが例だつた。しかしさうした水路は次第にすたれた。

四

さうした變遷を考へるに、それからそれへミ飛行機のこと

なごも考へられて來る。空中行路の出來ることとは、今では成功不成功といふことではなくて、時期の問題になつた。遠からずしてさうした道が出來るやうになるに相違ない。海圖なごは必要がなくなつて、更に新しい空中路圖がそれに代るといふやうな時期が遠からずして來る。必ず來る。それを思ふこと不思議な氣がする。その時には地球の表面は全く變つて丁ふに相違ないのである。汽船、汽車、さういふものがすつかりなくなつて丁ふに相違ない。丁度川から民船がなくなつて了つたやうに。

また海は海で、表面の波をさけるために、潜水艇のやうな、全く海中に没却したものが多く用ゐられるやうになるかも知れない。そしてそれにつれて、人間の心が、また生活が全く別なものになつて丁ふかも知れない。否、たごへさうでないにしても、新しい感じや空氣がそれからそれへミ複雑して醸されて行くに違ひない。さういふ今の時にあつて、昔の道路のことなごを考へるにいふことにも面白くないこともない。